Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

073

三歳未満児の育児意識の実態に関する研究

濱田敦子　○金子邦子　井上裕子
（兵庫女子短期大学）（広英保育園）（矢倉保育園）

1．はじめに

現代社会における産業構造の変化は、労働形態の変化は勿論のこと、社会を構成する最も小さなグループともいえる家族形態に変化をもたらしている。
婦人労働の増加、核家族化は、都市部だけの現象ではなく、農村地帯においても、企業誘致などで兼業農家が増加し、母親も祖父母も仕事を持ち、乳児期から子どもを保育所に預けなければならないケースも増えている。

そこで本研究においては、旧来、祖父母と両親との協同で行なわれたり、地域ぐるみでされていた子育てが今どう変わってきているのか、また、乳児と父母・祖父母との関係、子育てにおける父母と祖父母の関係の実状を考察して、三歳未満児の子育てにおける人的環境を充実させる方向をさぐりたい。

2．研究の概要

(1)研究の方法

家庭における乳児期の子育ての人的環境の変化を切実に感じとっているのは、現在保育所に子どもを預けている保護者であろうと思われる。そこで、兵庫県の農村部にあるA．B保育所、都市部（新興住宅地及び中央都市)のC．D．E保育所の保護者、及び祖父母にアンケートによる調査を行い、乳児期の育児に関する実態と、育児意識の実態を捉える。

(2)調査事項

①年齢②子どもの数③家族構成④３歳までの子育てをした人⑤３歳までの育児で特に困った事⑥子育ての悩みについて⑦育児の手助けについて⑧父母と祖父母の子育ての相違点⑨子どもとの遊びについて⑩子育ての楽しみについて⑪子育て援助のあり方について⑫子育てと家族構成について⑬自分にとって子どもとは何か等、回答を求める。

(3)調査時期

平成５年１０月

3．結果と考察

調査に対し回答を得られたのは農村部では
①父親１３８名　②母親１４６名　③祖父２２１名　④祖母２２６名　（計７３１名　回収率８１％）
都市部では
①父親１２４名　②母親１４０名　③祖父１２１名　④祖母１６２名　（計５４７名　回収率６０％）
でアンケート回収率は農村部が高く、育児に関する関心の高さがうかがえる一方、都市部では、祖父母が遠くに住んでいる為に回答が得られにくい、父親が仕事に忙しく回答が得られにくいという農村部とは異なった生活が浮き彫りになっている。

家族構成では、農村部の祖父母11％、父母38％が核家族、都市部では祖父母55％、父母68％が核家族であった。特に都市部では、現在核家族の祖父母のうち、64％が子育て時期にも核家族であり、現在二世代同居の祖父母の中でも51％が子育て時期には核家族であったと答えている。二代続いて核家族における子育てを経験している人が多い点が注目される。

(1)父親

「育児の手助けをしていますか」の問いに対して、農村部では全体の70％、都市部では78％が「している」と答えている。核家族が70％近い都市部では、せざるを得ないという事情もあろうが、農村部においても父親の育児に関する関心が高い。農村部では、その内容を「遊び相手になる」と答えた者が60％と多いが、都市部では、「入浴」「食事介助」「おむつ交換」等、子どもの基本的な生活に関する手助けが多くなっている。農村部、都市部とも共働きの家庭が増えはじめた中で、夫婦相互に協力しあっていることが推察できる

「手助けで困ることは」との問いに対して、都市部の核家族の父親は、70％が「困っていない」と答えており、ぐずったり、なきやまなかったりする子どもにもなんとか対処しようと工夫する姿が見られ、「困ることは自分の帰宅が不規則で十分なスキンシップがとれないこと」と、育児そのものではなく、自分自身のあり方の問題をあげている父親もおり、育児が自分の生き方をも問いかける契機となっていることがうかがえる。

(2)母親

三歳までの子育ては農村部では「自分自身」と答えた人が80％、都市部では59％と祖母の子育て時期と比べると20％近く減少しており、多くの人に支えられて、乳児期の子育てをしている姿が浮かんでくる。援助者の第一は「夫」であり、祖母の子育て時代の援助者の第一

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

が同居家族であれ核家族であれ、「夫や自分の両親」であったことと逆転している。また乳児期の子育てで困ったことがあるかどうかでは、「ある」と答えた人は農村部では39%、都市部では47%で、特に都市部の核家族の母親が52%と「ない」をやや上まわり、援助者の2番目として保育所が27%にものぼっていることが注目される。困ったことの内容は、「子どもの病気や、偏食、食物アレルギー、生活習慣の自立の遅れ、性格」といった子ども自身に関わることの他、「同世代の子どもと遊ばせてやれない・しつけや育児方針での義母との意見のくい違い」といった人間関係に関する悩み、「育児と仕事の両立の難しさ」といった自分自身のライフスタイルに関する悩みがあげられており、子育てを広くとらえている視点がうかがえる。また、その悩みの相談は、「夫」というのが農村部、都市部でも第一位を占めているのは、子育ての援助者とも重なっている。また、農村部では、二世代同居が多い中で、家族よりも「同世代の友人」の方が相談しやすいと答えた人が多く、都市部の核家族の母親で「自分の両親」と答えた人が「友人」よりも多いことと考え合わせ、母親のおかれた状況、心理の複雑さを感じる。

(3) 祖父

自分の子どもの子育ての手助けを「あまりしなかった」人は、農村部では65%にもなっているが、都市部では現在二世代同居をしている祖父で「手助けをした」とこたえているのが60%もあり、「子育てには同居がいい」と答えたのも60%近くと、昔の育児の手助けの経験から、母親の育児に対する手助けを好意的に考えていることがうかがえる。自分の子どもの育児の手助けについては、現在の父親の手助けの幅広さと比べると内容は限られているが、中心都市の祖父の中には、「おむつ交換」や「授乳」といった基本的生活に関する手助けも見られる。

孫の育児の手助けについては、農村部、都市部とも「遊び」が中心で、外遊びの機会が多く、責任の少ない補助的なもの、しかし、子どもに伝承的な生活を伝えたいという願いがこめられていることがとらえられた。

(4)祖母

三歳までの子育てが「自分」や「自分の両親」「夫の両親」が中心で二世代の協同による形が多いことは前述の通りであるが、孫の子育てについては、「時々頼まれる程度」が多く、自分から積極的にすることは控えている。これは母親への「育児をどの程度頼むか」という問いに対する答え「時々頼む程度」と一致している。祖母が仕事を持っている人が農村部、都市部共半数近くあることも原因であろうが、「自分の子育てと現在の子育てで相違がある」と答えた人が母親よりも祖母の方が多く、特に農村部の祖母では90%になっている。こうした認識のズレが積極的な育児参加を控えさせる微妙な要因となっていることがうかがえる。実際の手助けは、同居の祖母は遊び相手になることが多く、核家族の祖母が子どもの基本的な生活面での手助けが多いことと比べると、責任ある育児は母親に任せて控えめにしている姿がここでも見られる。

孫との遊びでは、祖父と同様、外遊びがあげられているが、祖父と違って室内遊びも多く、遊びの内容が豊富で、孫に対する愛情が感じられる。また、「どんな手助けが必要と思うか」という問いに対しては、困っているときは積極的に助けてあげたいし、母親にも気ばらしをさせてあげたいという意見が多く、控え目な育児参加の裏に母親への思いやりがこめられている。

(5)子育ての楽しみ

いろいろな苦労があっても子育ては楽しいと思っている人が、祖母では70%、母親では80%現在の母親の方がやや多いが、「なぜ楽しいか」という問いに対しては、「子どもの成長と共に親も成長できた」と、自らも成長したことへの感謝を祖母、母親とも感じている。これは、子どもの可能性を信じ、子どもそのものを尊重するという姿勢を感じる。しかし、「子どもは何ですか」という問いに対しては、祖父母、父母とも「家の宝」や「自分の宝」といった答えが多く、子どもそのものの絶対性を認める立場は非常に少ない。

4．今後の課題

上記のように祖父母と父母の緊張関係の中でも子育ての喜びをそれぞれが味わっていることには、今後の可能性を感じる。又、少子化、高齢化社会を迎え、子育てのしやすい体制も社会的に整えられつつある。しかし、「子育ては楽しい」が「子どもは家の宝、自分の宝」という血縁的家族観が大半であるという意識のズレがある。このズレが、乳幼児期にはその成長を喜び、共に育ったと感謝するおとなの気持ちを、相対的な競争原理の前では揺るがす原因となったり、旧来の血縁家族に満足して、子育ての社会化を自ら制限してしまうブレーキになってはいないだろうか。

真実の子ども観、家族観がゆきわたることも同時に必要なことと考える。魂の入った子育て支援制度とする為に。

NII-Electronic Library Service